

「20世紀日本における知識人と教養 ―丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用―」 全事業一覧

安藤 信廣・黒沢 文貴（編）

二〇一二年度に開始した研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養―丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用―」（略称・丸山眞男研究プロジェクト）は、二〇一六年度末をもって完結する。

本プロジェクトは、「新しい世界認識を開く基礎となる教養の重要性が注目されている今日、20世紀において様々な知的分野で巨大な足跡を残し、教養についても独自の認識を展開した丸山眞男の業績の再評価が強く求められている」（平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業構想調書）（以下「構想調書」より）という認識を前提に、次のような目標を掲げて発足した。

1 丸山をはじめとする20世紀の知識人たちの教養形成過程及び教養観を解明する。

2 新渡戸稲造・南原繁・丸山らが知識人の国際的コミュニティ形成

に果たした役割を明らかにし、21世紀における新たな知的コミュニティ形成の方向性を探究する。

3 丸山文庫所蔵資料をデジタルアーカイブ化し、広く日本及び世界に向かって公開する。

このような研究目的のもとに、「21世紀の教養と知のあり方を究明する上で重要な貢献をすること」（「構想調書」概要1「研究目的・意義」より）が、本プロジェクトの最終目標といえる。

本プロジェクトでは、右の1〜3の研究目標を追究するために、二つの研究テーマを設定した。

〈テーマ1〉20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として

―

〈テーマ2〉丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ

構築

二つのテーマのうち、〈1〉は、右の研究目的の1・2に対応し、〈2〉は同じく3に対応している。もとより、両者は深く関わりあっており、両テーマの追究は孤立して行われるものでなく、協働し補いあって進めていくことを前提としている。

そこで、われわれは右の二つのテーマに配慮しつつ協働して、定期的な運営会議の開催、研究会・公開研究会、及び講演会・シンポジウムの企画と開催を行ってきた。以下は、そうした本事業の五年間にわたる過程と成果を一覧にしたものである。

一覧の編集にあたっては、以下の点に配慮した。

・便宜上、「テーマ別研究・事業の過程と成果」、「研究会・公開研究会」、「講演会・シンポジウム」の三つの事業に区分し、その中で年度別に構成した。

・以下に掲げている事業の概要は、本プロジェクト期間中に発行した『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』に掲載されたものをもとにしている（第八号～第十二号、二〇一三年三月～一七年三月）。この度の一覧作成にあたっては、各事業を全体の中に位置づけるため、若干の整理を試みたほか、誤記等についても修正を施した。

・研究会・公開研究会及び講演会・シンポジウムに掲げられた概要は、原則として各講師・報告者が作成したものに基づいている（一部を除く）。この度の一覧にあたっては、内容に関わらない範囲で表記等の一部改めた。

・本プロジェクトでは、参加研究者以外の関係者の方々から大きな助力を賜った。ここに掲載している関係者の方々の所属・役職は当時のものである。

I テーマ別研究・事業の過程と成果

丸山眞男研究プロジェクトでは、前記の二つのテーマに即しつつ相互に協働し、研究を進めてきた。その概要は以下の通りである。なお、本プロジェクトの研究・事業は、数名の研究者が協働で進めたもの、一人の研究者が二つ以上に関与しているものなどがあるため、各々の研究・事業の担当者名は割愛した（参加研究者ごとの研究テーマは、本書四頁以下を参照）。

二〇一二年度活動状況

〈1〉 20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―

一 教養の思想的系譜に関する研究

① 前近代日本における宗教と政治の検討

幕末期日本の政治思想と宗教との関係について、丸山眞男の既刊著作物を中心に調査しつつ検討を進めた。吉田松陰と漢訳イソップ物語の調査・研究、天皇制と天皇制に対する認識の変化過程の調査、徳川後期の学問状況の検討、宋学と江戸漢学の関係についての考察など、

多岐にわたる内容を対象とした。その際、『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』（以下、『センター報告』と略記）第八号に掲載された丸山眞男「戦中」東洋政治思想史」講義原稿」（宮村治雄・山辺春彦・金子元・川口雄一編）を参照した。

②戦後日本の民主化と教養・文化・教育をめぐる検討

丸山が師とした長谷川如是閑の教育観を中心に、長谷川及び丸山の既刊資料を対象として調査・検討した。長谷川が「教育者として自覚」すべき第一義的なことがらとして、日本の教育・教養・文化の伝統についての十分な理解を挙げていたこと（「伝統と教育」『改造』一九五二年七月）に着目し、その戦時下の発言等を調査した。

③近代日本におけるリベラルアーツ、教養の系譜の研究

丸山の教養観、及び南原繁の教養観につき検討した。大学におけるリベラルアーツについて、南原・丸山のいくつかの問題提起をとらえ、それぞれの発言に注目しつつ彼らの大学教育論につき調査・検討した。北海道大学新渡戸稲造文庫所蔵資料を調査するとともに、その結果を整理した。

④「精神的貴族主義」の検討

丸山の思想の中心をなすとされる「精神的貴族主義」について、丸山の刊行著作物を参照しつつ考察した。研究会・講演会においてもこ

の点に注意した発言を得、それらも参考として検討した。

二 国際的視野から捉えた丸山の学問・思想に関する研究

①丸山政治学の認識論的な特徴の研究

一九六〇年代の社会運動の国際比較の中で、米国・日本・西欧の社会運動における知識人の位置について考察した。その際、丸山政治学の認識論的特徴についての検討にも及び、一九六〇年代の先進国における知識人と学生の関係の変容についても調査・検討した。

②丸山とアメリカの学問・社会・政治との関係についての検討

丸山文庫所蔵の丸山の英文書簡の調査と検討を開始した。現時点で、同資料によって丸山とアメリカとの関係についての立ち入った認識は可能となっていないが、同資料も含めて、アプローチの仕方を再検討しつつ調査・研究を進めている。

③近代中国思想の問題性の検討

基礎作業として丸山の既刊著作物を読み進め、丸山の日本政治思想史研究において東アジアがどう位置づけられているか、丸山の議論を踏まえることによってどのような東アジア論が構築できるか、東アジアからは丸山がどう受けとめられているかについて検討した。

また、丸山思想史学の方法と視点を援用して近代中国思想の見直しを試みた。特に、国民形成において個人の自由を模索した嚴復の思想

の位置づけを検討した。民衆一人一人を社会の基本単位と見なし、個人の自由・自立・理性に立脚した社会を探り、国民の公共性を考察・追究した厳復の思想構造を省察した。近代中国の主流ナショナリズムをはずれ、かつ主流ナショナリズムの盲点をついた厳復の思想的価値を考察するとともに、他の思想家・思想潮流についても調査を行った。

〈2〉丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

一 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査・翻刻公刊

① 福沢諭吉に関する資料の翻刻

丸山眞男の福沢諭吉に関する資料は、量が多くかつ錯雑している。そのためこれまでは、大まかな整理にとどまっていた。そこで今回精密な調査を行ったところ、丸山の講演速記、自筆講演原稿、公刊された講演の、これまでには知られていなかったバージョンが発見された。その概要は『センター報告』第九号に掲載。

② 「東洋政治思想史講義」の翻刻

丸山文庫所蔵の草稿資料をもとに、「戦中『東洋政治思想史』講義原稿」を翻刻した。『センター報告』第八号に掲載。

二 一九五〇年代後半の日本政治思想史講義の復元

(1) 一九五〇年代後半に丸山が東京大学法学部で行った「東洋政治思想史」講義を復元するために、資料の発掘と収集活動を行った。近藤

邦康氏（東京大学名誉教授）から、一九五六・五七両年度の受講ノートを拝借した。(2) 文庫所蔵の一九五〇年代後半の講義ノート（丸山自筆）の調査を進めた。(3) 丸山眞男研究プロジェクトの第一回研究会において、既刊論文で丸山が日本思想史に対する接近法にふれた言及部分を検討し、その変化過程の跡づけを試みた。

三 「正統と異端」研究会関係資料の調査と整理

主として、(1) 関係者のヒアリングと、(2) テープ起し原稿・ゲラ類の整理を進めた。(1) の活動の副産物として、二〇一二年九月に石田雄氏（東京大学名誉教授）より研究会のレジュメを含む関係資料一式が、二〇一三年三月に一九八〇年代の研究会担当編集者（筑摩書房）であった勝股光政氏より録音テープが、寄託・寄贈された。その音源資料のデジタル化の作業に着手した。

四 丸山眞男宛の国内外来簡書簡の調査

丸山文庫所蔵の丸山眞男への来簡は、丸山家保管時に基礎的な整理がなされたうえで文庫に移管されたものと、図書・雑誌、ノート・草稿類、寄贈抜刷などを整理するなかで発見されたものの二種が存在する。これらの整理のため、どのような作業が必要であり、どの程度の時間を要するかに関する、予備調査を行った。なかでも発信者中、特に量が多い人物の書簡を選び、すべてを読んで発信日付を特定した。

五 丸山文庫デジタルアーカイブの構築

丸山文庫所蔵草稿類のデジタルアーカイブ構築のため、事前調査を行った。具体的には、(1)所蔵資料の内容、(2)丸山文庫の資料に適したシステムの構築、(3)著作権者より公開の許諾を得るための手続きについて、調査と検討を進めた。

六 丸山文庫バーチャル書庫の構築

バーチャル書庫に詳しい研谷紀夫氏（関西大学准教授）にヒアリングを行い、今後の見通しを東京女子大学図書館職員と文庫スタッフで協議した。そのうえで業者にヒアリングを行い、見積書の作成を依頼した。

七 楽譜類と楽譜への書き込みに関する調査・公開

『センター報告』第七号掲載の調査報告「丸山文庫楽譜蔵書の調査をひとまず終えて」（土合文夫）をもとに楽譜の書き込み状況を確認し、公開方法の検討を行った。

八 音声資料のデジタル化と公開

以下のカセットテープの寄託・寄贈を受け、順次これらのデジタル化を進めた。(1)石田雄氏より三本、(2)勝股光政氏より四五本、(3)増子信一氏より二本、(4)丸山眞男手帖の会より一本（詳細は『センター報告』第九号所載の「二〇一二年度 丸山文庫所蔵資料の公開と利用状況」を参照）。また、以前にデジタル化を行った音源資料については、

公開のための準備を進めた。

九 ホームページの公開

二〇一二年三月二八日に、丸山眞男研究プロジェクトのHPを公開した。なお、二〇一六年度より東京女子大学公式サイトとの全面リニューアルにともない、URLは下記の通り変更されている。

<http://office.twcu.ac.jp/univ/research/project/maruyama-project/>

二〇一三年度活動状況

〈1〉20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―

一 教養の思想的系譜に関する研究

①長谷川如是閑と丸山の比較分析及び関連文献・資料の調査と整理
前年度にひきつづき、長谷川如是閑の発言に見られる教育・教養の伝統とは何かを明らかにするために、長谷川が精力的に取り組んだ戦時下での議論及び戦後の議論をとりあげ、時代の背景や思潮との関係で考察した。

②近代日本におけるリベラルアーツ、新渡戸稲造と矢内原忠雄の理念・実態に関する研究

丸山の思想的系譜の理解、丸山以前の教養についての認識について調査・考察した。近代日本の教養の位置づけをめぐって、矢内原忠

雄を中心に考察し、その際丸山の観点を参照した。

二 国際的視野から捉えた丸山の学問・思想に関する研究

① 欧米

欧米文献研究について、アメリカ政治学に関する書物の研究を重点的に行った。「丸山眞男のアメリカ観」というテーマにつき、アメリカ政治学との接点を模索した。丸山眞男とアメリカ文化の交錯に関して、近代化論をめぐる論争を中心に検討した。

② 中国・東アジア

中国文献研究は、前近代から現代にいたるまで、幅広い書物を対象とした。前近代については丸山の儒教・朱子学の解釈について研究を進めた。丸山眞男の福沢論吉研究の視点を通して、福沢の思想と中国近代知識人の思想とを比較し、中国思想の前近代から近代への継起における問題点を検討した。その過程で、現代中国の文化大革命時代および今日の改革開放時代の思想の深層に連続している思考様式をつかむことができた。また共産主義体制についての丸山の認識についても考察した。

前年度にひきつづき、丸山の日本政治思想史研究において東アジアがどう位置づけられているか、丸山の議論を踏まえることにより、どのような東アジア論が構築できるか、東アジアからは丸山の議論がどう受けとめられているか、を検討した。

〈2〉丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

一 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査

(1) 英文草稿類も含めた丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査を進めた。(2) 同資料や丸山文庫所蔵図書等の調査の成果を基礎として、新たな本文校訂を行い、『丸山眞男集』全一六卷(岩波書店)の第四刷(実質的な改訂版)の刊行を二〇一四年三月より開始した。(3) 『丸山眞男集 別集』全五卷(岩波書店)刊行の企画が立ち上がり、『丸山眞男集』未収録作品、未公表作品等の調査を開始した。

二 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の翻刻公刊

(1) 「近代的ナショナリストとしての福沢先生」と「一九四七年度・一九四五年度「東洋政治思想史」講義原稿」を翻刻した。『センター報告』第九号に掲載。

(2) 二〇一五年刊行予定の『丸山眞男集 別集』に収録する「正統と異端」研究会について、研究会の録音記録を調査し、文字起こし作業に着手した。

(3) 丸山が東京大学法学部で行った一九五六―五九年度の「東洋政治思想史」講義の復元作業に着手した。

三 丸山文庫所蔵書簡類の調査と翻刻公刊

(1) 調査とリスト作成を進めた。(2) 竹田行之氏(元岩波書店編集者)のご協力を仰ぎつつ、吉野源三郎が丸山に宛てた書簡三六点を翻刻し

た。『センター報告』第九号に掲載。

四 丸山文庫所蔵草稿類のデジタル化とデジタルアーカイブ構築

丸山文庫所蔵草稿類のデジタルアーカイブに登録する画像を作成するため、ブックスキヤナを用いた同資料のデジタル化作業を進めた。

五 丸山文庫バーチャル書庫の構築

丸山文庫所蔵図書が丸山宅に所蔵されていた時の状況をインターネット上に再現する、丸山文庫バーチャル書庫の構築を進めた。

六 丸山文庫所蔵楽譜類の調査とデジタル化

丸山文庫所蔵の楽譜類、とくに丸山自身の書き込みが為されているものを中心とする調査と研究を進めた。ブックスキヤナを用いて丸山文庫所蔵楽譜類の丸山による書き込みのあるページのデジタル化作業を開始した。

二〇一四年度活動状況

〈1〉20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として― 一 教養の思想的系譜に関する研究

新渡戸稲造の札幌農学校以来の親友である内村鑑三の日本とアメリカ合衆国における体験に根ざした「ホーム」論について考察した。

二 国際的視野から捉えた丸山の学問・思想に関する研究

丸山の「執拗低音」の視点に基づき、中国伝統の思想構造を分析した。また、ラスキヤスターリン批判に関する一九五〇年代の丸山論文を中心に、丸山政治学の視野の特質を解明し、さらに、一九六〇年の政治学講義の構成を検討することで、昭和史論争が発生した時代の政治思想の課題を考え直した。

三 丸山眞男生誕100周年記念中間シンポジウムの開催

二〇一四年六月二七日、東京女子大学にて丸山眞男生誕100周年記念中間シンポジウムを開催した（一般参加者はのべ四五〇名）。統一テーマは、「現代世界の中で丸山眞男をどう読むか」。本プロジェクトの中間的成果を集約した講演・報告がなされ、議論を深めた。本シンポジウムの詳細は『センター報告』第十号に、概要は本書二六三頁以下に掲載。

〈2〉丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

一 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査

(1) 英文草稿類も含めた丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査を進めた。(2) 前年度にひきつづき、『丸山眞男集』全一六卷（岩波書店）第四刷の刊行を継続した。

二 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の翻刻公刊

(1) 東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』全五卷（岩波書店）

の刊行を開始した。第一巻は二〇一四年一二月、第二巻は二〇一五年三月刊行。

(2) 前年度にひきつづき、『丸山眞男集 別集』第四巻・第五巻に収録予定の「正統と異端」研究会について、文字起こし作業を進めた。

(3) 「Some Aspects of Moral Consciousness in Japan」(倫理意識の「古層」) 原稿を翻刻した。『センター報告』第十号に掲載。

(4) 前年度にひきつづき、丸山が東京大学法学部で行った一九五六～五九年度の「東洋政治思想史」講義の復元作業を進めた。

三 丸山文庫所蔵書簡類の調査

前年度にひきつづき、調査とリスト作成を進めた。

四 丸山文庫所蔵草稿類のデジタル化とデジタルアーカイブ構築

丸山文庫所蔵草稿類のデジタルアーカイブに登録する画像を作成するため、ブックスキヤナを用いた同資料のデジタル化作業を進めた。対象となる資料約四〇〇〇点のうち、二〇一四年一二月現在、約三分の一にあたる約一四〇〇点のデジタル化が終了した。

五 丸山文庫バーチャル書庫の構築

丸山文庫所蔵図書が丸山宅に所蔵されていた時の状況をインターネット上に再現する「丸山眞男文庫バーチャル書庫」を二〇一五年三月九日より公開した (<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko/>)。

六 丸山文庫所蔵楽譜類の調査とデジタル化

(1) 丸山文庫所蔵の楽譜類、とくに丸山自身の書き込みが為されているものを中心とする調査と研究を進めた。

(2) ブックスキヤナを用いて丸山文庫所蔵楽譜類の丸山による書き込みのあるページのデジタル化作業を行った。二〇一四年一二月現在、丸山による書き込みのある楽譜四三四冊のうち、半分の二一五冊(作曲家名がB・L・Wで始まるもの)のデジタル化を完了、公開し、東京女子大学図書館において閲覧可能となった。その後二〇一五年三月三十一日にデジタル化作業が完了し、すべてを閲覧可能とした。

七 その他の事業・成果

(1) 平石直昭編『丸山眞男座談セレクション』上・下(岩波現代文庫、二〇一四年)が刊行された。同書は、「座談の名手」と呼ばれた丸山と同時代の知識人たちとの座談を身近に接することを可能にした。

(2) 二〇一四年一〇月三日～一二月三日、「丸山眞男生誕百年」企画を杉並区立西荻図書館と共同開催した。十一月一日には、記念講演として「丸山眞男の今日的意義について」(講師…平石直昭氏)、「丸山眞男文庫の事業」(講師…山辺春彦氏)が行われた。

二〇一五年度活動状況

〈1〉20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―

一 教養の思想的系譜に関する研究

① 南原繁と丸山との比較分析及び関連文献・資料の調査と整理

戦後日本の民主化と教養・文化・教育をめぐる思索内容について、丸山と、その師・南原繁とを比較しつつ分析を行った。南原については、委員長を務めた教育刷新委員会の詳細な議事録をもとに、戦後教育改革における民主的道德の形成に関わる論議を取り上げた。丸山の見解については、丸山文庫所蔵の資料を用いて考察しつつ、関連する文献資料の調査と整理を進めた。

② 新渡戸稲造ら札幌農学校に連なるキリスト者の「ホーム」論の検討
北海道におけるキリスト教徒のコミュニティについて調査し、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾（第一世代）、有島武郎、森本厚吉（第二世代）といった、札幌農学校に連なるキリスト教徒たちの「ホーム」論を検討した。とくに札幌キリスト教徒第二世代の有島、森本は、吉野作造とも親しく、文化生活運動を展開したことが知られており、大正期までのキリスト教系知識人たちが、「ホーム」の概念とどのように対峙し、変容させていったのかを明らかにした。

二 国際的視野から捉えた丸山の学問・思想に関する研究

① アメリカ

丸山とアメリカの知識人の知的交流について、とりわけ戦後のアメリカにおいて傑出した宗教社会学者であるロバート・ベラーとの関係について考察した。両者が共有していた点や、ベラーの進化論的アプローチに対する丸山の評価について、また宗教が歴史的發展に果たす役割についてどのように考えていたのか、宗教と社会科学の間に横たわる問題について分析を進めた。

② 東アジア

丸山の『日本の思想』の方法論に基づいて、中国思想史にみられる異文化受容の様式を検討した。また、溝口雄三の中国思想史研究を対象に、中国の郷里空間というユニークな社会様式をどう認識すべきか、哲学、思想、社会史などの角度から構造的に考察した。加えて、丸山による孫文の三民主義論を分析した。

③ 儒教解釈

丸山の儒教解釈について研究を進めた。日本の高等教育機関における「教養」教育と学問の専門分科を超えて諸領域相互の連関のなかで成立する「思想史」学の関係、およびその史的展開を解明した。その一端として、近現代日本の思想史研究における「儒教」の捉え方の変遷を調査した。さらにマックス・ヴェーバー、パウル・ティリッヒ、

ロバート・ベラーら欧米における「宗教」学の研究と、その影響を受けた丸山らの日本「思想史」学における宗教的伝統の解釈を、相互に関連づけながら分析した。丸山らの二〇世紀日本の「思想史」研究が、一方的な学問の受容にとどまらず、海外の学界にどのような学問的発信をしたのかを検証した。

④ 一九五〇年代の世界情勢と政治思想の課題について

マルクス主義のあり方を再検討しながら、政治学の基本的原理を提示し、かつそれを独自の形で再構成しようとしている、ラスキやスターリン批判に関する一九五〇年代の丸山論文を中心に、丸山政治学の視野の特質を説明し、さらに、一九六〇年の政治学講義の構成を検討することで、昭和史論争が発生した時代の政治思想の課題を考え直した。

〈2〉丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

一 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査

(1) 英文草稿類や音楽関係資料を含む丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査を進めた。(2) 前年度にひきつづき、『丸山眞男集』全一六卷(岩波書店)第四刷の刊行を継続し完結した。また、丸山ゆかり夫人が亡くなられた二〇一一年から、さらに二〇一五年にいたる丸山文庫を基礎とする活動を記録するため、前の『丸山眞男集』別巻を大幅に組みなおした新訂増補『丸山眞男集』別巻を刊行した(二〇一五年七月)。

二 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の翻刻公刊

(1) 東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』第三卷(二〇一五年六月)を刊行した。

(2) 前年度にひきつづき、『丸山眞男集 別集』第四卷・第五卷に収録予定の「正統と異端」研究会の記録について、研究会の録音の文字起こし作業を進めるとともに、関連資料の調査を行った。研究会に関連する自筆原稿の一部を『センター報告』第十一号に掲載。

(3) 丸山眞男が東京大学法学部で行った一九五六〜五九年度の「東洋政治思想史」講義の復元作業を進めた。

(4) 丸山眞男が東京大学法学部で行った一九五〇年度の「政治学史」講義の復元作業を進めた。『センター報告』第十一号に掲載。

(5) 丸山眞男が李沢厚との対談時に作成したメモの翻刻を行った。『センター報告』第十一号に掲載。なお対談の詳細は、近藤邦康「一九八九年三月二〇日 丸山眞男・李沢厚対談」『センター報告』第十号を参照。

三 丸山文庫所蔵書簡類の調査

前年度にひきつづき、調査とリスト作成を進めた。

四 丸山文庫所蔵草稿類のデジタル化とデジタルアーカイブ構築

(1) 丸山文庫所蔵の草稿類の画像をインターネット上で公開する「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」の部分公開を二〇一五年六月

一日より開始した (<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives/>)。

(2) デジタルアーカイブに登録する画像を作成するため、ブックスキヤナを用いた同資料のデジタル化作業を進めた。対象となる資料約四八〇〇点のうち、二〇一五年十二月現在、約五分の二にあたる約二〇〇〇点のデジタル化が終了した。これによって丸山眞男作成の資料はすべての画像がデジタルアーカイブ上で閲覧可能となった（但し丸山以外の人物の著作権が関わる資料は本学図書館内の閲覧に限定している）。

五 新渡戸稲造関連資料アーカイブの調査

本プロジェクトでは、アーカイブとしての丸山文庫の整備・拡充と並行して、新渡戸稲造関連の第一次資料をもつアーカイブの内容と相互の関連性との調査を研究計画に掲げている（「構想調査」より）。その第一歩として、二〇一五年十二月の北海道大学文書館・附属図書館（新渡戸稲造文庫）にて調査とヒアリングを行った。大学文書館には、学生時代の新渡戸の聴講ノートや、新渡戸の講義を聴いた学生たちのノート、新渡戸への来簡類など貴重な資料が多くある。また、附属図書館の新渡戸稲造文庫には、農学・経済学関連の洋書を中心とした手沢本が所蔵されており、これらの書き込みの概要を調査した。また、同図書館には、佐藤昌介文庫・内村鑑三文庫があり、新渡戸が熟読したトマス・カーライルの *Sartor resartus* をそれぞれ所蔵している。そこで、佐藤文庫・内村文庫所蔵の同書の書き込みを調査した。

文書館・図書館それぞれの職員より、新渡戸稲造の第一次資料所蔵機関、その調査の留意点等についてヒアリングを行った。

つぎに二〇一六年二月、青森県十和田市の新渡戸記念館で調査を行った。同館は、新渡戸稲造の父祖が推進した三本木原開拓関連資料を中心とする広範かつ多様な資料を所蔵しているが、わけても本プロジェクトの趣旨において、新渡戸稲造の手沢本（和書・約七〇〇点）が重要である。所蔵資料の中には、『論語』の術語の英語訳を試みた跡、荻生徂徠・太宰春台などの近世文献を熟読していたことを示す跡、台湾勤務時代のポケットノートなど、北大所蔵資料と強い関連性をもつ資料も数多く認められる。また、新渡戸稲造関連の第一次史料をもつアーカイブ間を横断するシステムや共同研究の可能性について、新渡戸常憲館長をはじめとする同館職員と意見を交わすことができた。

二〇一六年度活動状況

〈1〉 20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―

一 教養の思想的系譜に関する研究

(1) 二〇〇六年改定で削除された、教育基本法（一九四七年）前文における「この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである」という文言の意味を、教育刷新委員会等で戦後教育改革の主導的役割を果たした南原繁の教育論議から考察を進めた（素材としては同議事録や、一九四六年「日本国憲法」等を収録した『人間と

政治』（一九五三年）など。それと並行して、丸山が影響を受けた尾崎行雄の敗戦直後の言論活動と社会教育活動に着目して、資料の整理とその内容の整理を試みた。

また、一九四六年七月の第一回公民科教科書編集会議の列席者の一人として丸山眞男の名が記録されており、彼の執筆担当予定が「国家生活」「近代政治」であったことに注目して、その後の社会科や政治教育に関する論議をとりあげ、丸山の教育思想の内容と意味を考察した。今後は、同会議にも出席していた清水幾太郎の教育論議について、例えば市民文庫として刊行された『私の教育観』（河出書房、一九五一年）収録の「教育の問題と方法」（一九四六年）などを手がかりに考察を進め、この間、発掘され刊行された丸山の教育論議にかかわる資料を整理・分析して、本研究プロジェクトで掲げた課題をさらに探究していきたい。

(2) 現在、18歳選挙権の導入とともに社会で課題となっている、シティズンシップ教育の問題に関連して、「政治と教育」の問題について丸山がいかに考察したか、また、高校教育において丸山の文章がいかに用いられたかについて調査し、その成果をまとめた。また、丸山「三たび平和について」にも現れている国連中心主義の思想について、中村哲や横田喜三郎の思想とも比較しつつ、その成果をまとめた。

二 国際的視野から捉えた丸山の学問・思想に関する研究

(1) 丸山眞男を評価する上で重要なテーマの一つとなる占領改革の評価を再考するため、近年の占領研究の動向調査を行った（油井大三郎『未完の占領改革』（初版一九八九年刊）増補新装版（二〇一六年三月）巻末の「占領期研究を再訪する」を参照）。初期の占領改革研究では占領改革を積極的に評価するものがほとんどであったのに対し、冷戦終結後の研究には、ジャーナリストの評論的著作を中心として、最近のネオナショナリズム台頭の影響を受けて、占領期を「主権喪失期」として批判的に研究する動向が目立つようになってきた。しかし、これらの近年の研究には現状から過去の解釈を一面化する欠陥があり、学問的研究としては否定的な側面も含めて総合的な解釈が必要である。

(2) 丸山文庫での資料調査によって、ロバート・ベラーほかアメリカの知識人と丸山との交流を示すものだけでなく、アメリカの右翼に対する丸山の深い関心を示す、かなり貴重な資料に突き当たった。これらの資料を念頭に置きつつ、今後は、丸山が戦時期に読み込んだドストエフスキー、波多野精一、その他宗教関連の著作を調査し、丸山とベラーとの関係性について更に掘り下げていく。

(3) 前年度にひきつづき、丸山の思想史学の方法に基づき、中国思想史にみられる異文化受容の様式を検討するとともに、丸山の「執拗低音」の視点に基づき、中国伝統の思想構造を分析した。具体的な対象としては、孫文を取り上げ、孫文の民族主義を「大アジア主義」と関連して考察するとともに、孫文の民権主義の実践における創造

に注目し、その伝統思想に対する文脈転換と西洋思想に対する文脈転換を考察した。とくに孫文が民権主義を唱えるときに直面していた苦境の中に「執拗低音」というものが見られる。丸山思想史学の方法や視点を通じて、そうした「執拗低音」に対する孫文の悪戦苦闘があり、まさにその中から思想の創造が現れてきた、ということが見えてきた。

三 丸山眞男没後20周年記念国際シンポジウムの開催

二〇一六年一〇月一四日、東京女子大学にて丸山眞男没後20周年記念国際シンポジウムを開催した(一般参加者は約三〇〇名)。統一テーマは、「新しい丸山眞男像の発見 その世界大の視圏と交流のなかで」。丸山眞男の学問・思想の世界、及びそれを形成し広げた他の思想家・知識人たちとの知の交流を、各国のすぐれた研究者がそれぞれの観点から掘り下げていくことで、現代の「教養」のあり方について議論を深めた。

本シンポジウムの詳細は本書に、概要は『センター報告』第十二号に掲載。

四 「20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―」を

テーマとした論文集の作成・公刊

テーマ1 「20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―」参加研究者が各自の研究テーマの成果を、論文にまとめ公刊した。

本書に掲載。

〈2〉丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

一 丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査・翻刻公刊

- (1) 丸山文庫所蔵の未公刊の英文草稿類の調査を進めた。「Marxism in pre-war and post-war Japan」(資料番号365)の翻訳を『センター報告』第十二号に掲載。

- (2) 前年度にひきつづき、『丸山眞男集 別集』第四巻・第五巻に収録予定の「正統と異端」研究会の記録について、研究会の録音の文字起こし作業および関連資料の調査を進めた。研究会に関連する自筆原稿の一部を『センター報告』第十二号に掲載。なお、『丸山眞男集 別集』第四巻は二〇一七年内に、第五巻はそれに続けて刊行の予定。
- (3) 一九五〇年代後半の「東洋政治思想史」講義の復元作業を進めた。強い関連性をもつ一九五六年度と五九年度の講義、五七年度と五八年度の講義の調査と編集を終え、出版社に入稿した。『丸山眞男講義録』の続刊として東京大学出版会より二〇一七年九月に刊行予定。
- (4) 二〇一六年十一月、三島市郷土資料館(市立楽寿園内)にて庶民大 学三島教室関連資料(高橋省吾家文書)の調査を行った。当該資料の丸山文庫所蔵資料との関連性、庶民大当時の拠点の場所などを特定することができた。調査結果の詳細は、『センター報告』第十二号に掲載。

- (5) 二〇一七年一月〜二月、飯田市立中央図書館、県立長野図書館、信

濃教育博物館にて、一九四六年、四八年の当地における丸山の講演活動等の評伝的事実の調査を行った。『丸山眞男集 別集』第一巻収録の講演記録「政治嫌悪・無関心と独裁政治」、「民主主義政治と制度」（いずれも一九四八年）の背景事情等を特定することができた。また、臼井吉見文学館（安曇野市）にて、未公表の丸山執筆原稿の調査・収集を行った。調査結果の概要は、『丸山眞男集』別巻（新訂増補）の正誤表の中で示される予定。未公表原稿（コピー）は、草稿類デジタルアーカイブにて公開する予定。

二 丸山文庫所蔵書簡類の調査・公刊

(1) 丸山眞男宛の国内外からの来簡類の調査を進めたところ、発信者別で約三四〇〇名の書簡に上ることがわかった。この調査に基づき、発信者名の書簡リストを作成した。今後、この書簡リストに基づき、発信者別の通数や各書簡の発信日などの特定、それらの情報のリスト化を進める予定。

(2) 鷺巣力氏（元平凡社編集者、立命館大学加藤周一現代思想研究センター長）のご協力を仰ぎ、加藤周一が丸山に宛てた書簡二六通を翻刻した。『センター報告』第十二号に掲載。

(3) 『センター報告』第九号に丸山眞男宛吉野源三郎書簡三六点を翻刻したが、その後新たに、吉野書簡四点をご子息の丸山彰氏よりご寄贈いただいたため、追補として翻刻した。『センター報告』第十二号に掲載。

三 丸山文庫所蔵草稿類のデジタル化とデジタルアーカイブ上の公開
(1) 丸山文庫草稿類の保存とデジタルアーカイブ上の公開のため、ブックスキヤナを用いた同資料のデジタル化作業を進めた。対象となる資料約五〇〇〇点のうち、二〇一七年一月末日現在、半分に近い約二三〇〇点のデジタル化が終了した。これらのすべてを東京女子大学図書館内で閲覧することが可能である。
(2) 著作権継承者より許諾を得て、岡義武氏作成資料の一部をデジタルアーカイブ上で公開した。その他の岡氏作成資料は、東京女子大学図書館内で閲覧可能である。

四 丸山眞男記念比較思想研究センター関連ウェブサイトの外国語訳文の公開

以下のウェブサイトの英語訳文・中国語訳文を作成・公開した。

- (1) 「丸山眞男記念比較思想研究センター」ホームページ…「概要」
- (2) 「丸山眞男文庫」ホームページ…「概要」「所蔵案内及び検索方法」
- (3) 「丸山眞男研究プロジェクト」ホームページ…「概要」「メンバー」
- (4) 「丸山眞男文庫バーチャル書庫」…トップページ
- (5) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」…「このアーカイブについて」

これらのうち、(1)～(3)は二〇一七年三月に、(4)(5)は二〇一六年六月に作業を完了し、公開した。

五 その他の事業・成果

以上の調査・研究を踏まえて、さらに次のような事業と成果を示すことができた。

(1) 松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本 丸山眞男回顧談』上・下(岩波現代文庫、二〇一六年)が刊行された。同書は、単行本として刊行された松沢・植手編『丸山眞男回顧談』(上・下、二〇一一年)をもとに、平石が新たに編者に加わり、丸山文庫所蔵資料などもフルに活用した詳細にわたる補注を加えた上、解説(平石「人生への追記」)を付し、『定本 丸山眞男回顧談』として岩波現代文庫に収めたものである。

(2) 立命館大学加藤周一文庫の公開にともない、同大学加藤周一現代思想研究センターとの連携・協力を強化した。二〇一六年一〇月〜一月、加藤文庫での展示企画のため、丸山文庫所蔵の丸山眞男宛加藤周一書簡を貸出した。

(3) 二〇一六年七月一日〜一〇月一四日、「丸山眞男没後20周年記念 東女生が挑む 丸山眞男展」を東京女子大学図書館と共同開催した(会場は図書館一階)。またコラボ企画として図書館が「丸山眞男を読んで書評を書こう!」を開催。学生より六点の書評が寄せられた。概要は、『東京女子大学学報』二〇一六年度第三号(通巻六六二号)に掲載。

(4) 二〇一七年一月、紀伊國屋書店が「東京女子大学「丸山眞男研究プロジェクト」完結記念 丸山眞男ブックフェア」を開催し、これに全面

協力した(会場は新宿本店三階)。一月二一日、会場八階にて紹介トークイベント「東京女子大学丸山眞男文庫の「現在」」が開催された。

六 自己点検・評価及び外部評価の実施

以上の事業内容・成果を主な内容とする自己点検・評価報告書を作成し、これに対する外部評価を実施した。報告書の内容と外部評価の結果は、東京女子大学公式サイトの中で公開予定である。

II 研究会・公開研究会

丸山眞男研究プロジェクトでは、参加研究者による定例の研究会を開催し、各研究テーマについて議論を重ねた。なお、テーマや時宜に応じて、外部より研究者を招き、本プロジェクトの研究テーマに関する報告をお願いした。また、年一回、一般公開の研究会を開催し、参加研究者が深めてきた研究・事業を広く社会に発信し、議論を深めた。そのため、公開研究会の報告者や論題は、本プロジェクトの研究・事業の進捗状況を踏まえ、参加研究者が協議の上、決めた。以下、研究会・公開研究会の概要を一覧として掲げる。

二〇一二年 度研究会・公開研究会

◇ 第一回研究会 (1)

開催日 二〇一二年一〇月一二日

報告者 安藤信廣

論 題 幕末の『イソップ物語』の読まれ方―中国との比較にも触れて―

概 要 一八四〇年、中国・広東で英人ロバート・トームにより『イソップ物語』が漢語に訳され、『意拾喻言』と題して刊行された。この『意拾喻言』から出た一本『伊娑菩喻言』が、幕末嘉永・安政年間に日本に伝わった。その最初の読者の一人が吉田松陰（一八三〇―一八五九）だった。

吉田松陰は、『伊娑菩喻言』を「自謀騙人」の物語として受けとめ、西欧人の論理を端的に示すものと理解した。とくに西欧が日本の国内政治に介入し、侵略を行う際の論理・方法を示すものとして、いわば西欧の（悪辣な）政治思想を示すものとして理解した。そのような意味で『伊娑菩喻言』は松陰の攘夷論を助長したと考えられるが、しかし西欧の実像を全体としてとらえようとする態度、ひるがえって日本を相対化して見る視点を育てる一助にもなった。攘夷論形成の中で幕府批判を深めることになる松陰の思想的営為の、一断面がここに見える。

一方、中国では、清朝末期の啓蒙的翻訳家林舒（一八五二―一九二四）が、一九〇六年に『イソップ物語』を『伊索寓言』と題して訳出している。ここには数多くの林舒の見解・意見が記されている。その見解の中には、『イソップ物語』の一般的な読み方を逆転させ、ことに西欧の圧迫に対して主体性を守り独立を貫くことを強調して説くものが多い。

松陰と林舒。二人は『イソップ物語』の寓話を国際関係の中で、ともに士大夫的に読んだのだった。しかし松陰は幕府批判という政治論の確立に向かい、林舒は抵抗主体の確立という倫理観の形成に向かった。それがどのような問題を持つか、幕末の思想状況についての丸山眞男の論点等を参照しながら、今後考えて行きたい。

◇ 第一回研究会 (2)

開催日 二〇一二年一〇月一二日

報告者 平石直昭

論 題 丸山文庫所蔵の自筆講義ノート（五〇年代後半）について
概 要 このプロジェクトにおける私の担当は、丸山による一九五六年度と五九年度の「東洋政治思想史講義」（東大法学部）を復元・公開することである。この作業を進める上で、戦後の丸山における日本思想史方法論の変容の跡づけが問題になる。縦の歴史的発展段階論に對して、横からの文化接触を重視する見方への変化である。「古層」論はこれと関係する。後に丸山は、五九年度講義ではじめて古代から論

じ始め、欧米遊学後の六三年度以後、「原型」論を冒頭で講ずるようになったと書いている。『丸山眞男集』別巻（初版）の年譜もそう記している。しかし死後発見された自筆ノートや学生聴講ノートの調査から、古代から論じ始めたのは五六年度であったことが分かっていく（『丸山眞男講義録第六冊』の「解題・付」を参照）。本報告では、丸山の発言や諸資料を検討して、こうした齟齬が生じた所以など、問題点の洗い出しと整理を試みた。

◆第二回研究会（1）

開催日 二〇一二年一月一四日

報告者 土合文夫

論 題 丸山眞男の楽譜蔵書をめぐって

概 要 丸山が遺した楽譜類のうち、丸山文庫が所蔵する六〇〇点あまりについては、調査結果を『センター報告』第七号掲載の「丸山文庫楽譜蔵書の調査をひとまず終えて」で報告した。書き込みなどの具体的なデータは、いずれ東京女子大学図書館OPAC上で公開されることになるだろう。

ただし、これ以外にも、ピアノの演奏譜を中心になりの点数の楽譜が丸山家に残されていることが分かったので、数度にわたっておおまかな調査を行った。時間的な制約もあり、不完全な調査に留まらざるを得なかったが、丸山の遺した文章（ことに、歿後にまとめられた断章集『春曙帖』に所収のもの）からして、当然あるべきだが、丸山

文庫には収蔵されていない楽譜類（バッハの『平均律クラヴィーア曲集』、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトのピアノ・ソナタなど）の所在を確認できたことは収穫だった。

だが、丸山の音楽生活の全貌を窺うためには、楽譜の調査だけでは全く不十分であり、丸山家に残されていた膨大なレコードやCD・LDなどのコレクション、それにFM放送を録音したテープ、さらには、演奏会のパンフレット類などの調査が不可欠である。幸い篤志の方々によるこれらの資料の整理が継続中なので、その目途がつき、データを御提供いただければ、丸山の音楽とのかかわりについて、より完全に近い基礎資料が得られることになるだろうと期待している。

◆第二回研究会（2）

開催日 二〇一二年一月一二日

報告者 清水靖久（九州大学教授）

論 題 丸山眞男と米国

概 要 本報告の課題は、丸山眞男の米国観の分析を通じて、丸山の思想に新たな光をあて、その推移を明らかにすることである。丸山に対する米国の影響が無視しえないことは、これまでもしばしば指摘されている。報告者は、この点に加えて、米国に関する丸山の発言や態度は、日本における丸山の位置や自己認識、そして「日本観」を映し出す鏡としても把握できるという立場から、さまざまな時点における丸山の米国観と、その時期に日本国内で丸山が置かれていた状況と

を突きあわせるというアプローチを採用することによって、上述の課題に取り組んでいる。こうした方法自体に、本報告の大きな特色が見いだされる。

第Ⅰ章「米国ビザ問題」、第Ⅲ章「海外亡命」および第Ⅳ章「その後」前半部分では、実現しなかったものも含めて、数度の米国行に関する米国や丸山眞男文庫などでの調査の結果判明した事実が、丸山の米国観を規定した要因として提示される。その間に挟まれた第Ⅱ章「米国の不可解さ」と、第Ⅳ章の後半部分では、既刊のテキストから米国に関する丸山の発言や米国での体験談が抜き出され、丸山の米国観の特徴と変遷がまとめられている。

さまざまな一次史料から丸山の行動の軌跡を解明することによって、丸山の思想理解に新しい局面を切りひらくとする報告者の試みは、丸山研究の進展にとって、一つの重要な方向を指し示している。本報告に接した者（山辺）としては、以上のようにして明らかにされた丸山の行動やそれへの意味付与と、丸山の思想とを橋渡しし、丸山が書きのこしたテキストの内容理解に生かしていくことが、今後必要になるのではないかと感じた。（文責：山辺春彦）

◇第一回公開研究会

開催日 二〇一三年三月五日 一般参加者 約一一〇名

報告者 河野有理

論 題 「正統と異端」研究会をめぐって

概要 「正統と異端」研究会について、一九八〇年代後半の資料（未公開）を主として取り上げ、その意義について考察した。私見によれば、この資料を分析することで、従来支的であった見解に疑いを投げかけることができる。

この支配的見解とは、以下二つの図式から構成されている。一つは、丸山にとって〈夜店としての政治学〉と、〈本店としての日本政治思想史〉が截然として区別されてあったという図式である。この図式によれば、六〇年安保以降の丸山の研究態度は、この〈夜店〉から〈本店〉への回帰だということになる。二つに、この〈本店〉であるところの日本政治思想史の研究方法論について、五〇年代後半に、普遍的な発展段階論を前提にした「縦の歴史」から、「横から」の急激な文化接触の問題（「開国」）へとという変化が起きたという図式である。

政治学から、政治思想史へ。〈縦の歴史〉から〈横の歴史〉へ。八〇年代の丸山自身による「自己解題」（「原型・古層・執拗低音」一九八四年）にも依拠した、こうした通説的見解とは、必ずしも折り合いのつかないものが、今回扱った八〇年代後半の研究会資料には現われている。例えば、研究会における関心の比重は、この時期、〇正統からⅠ正統へと移動している。それにしたがって同一の対象に対するアプローチも変化した。六〇年代の研究会では、「疑似〇正統」の問題として把握されていた明治日本の「國體」は、八〇年代には日本国憲法（戦後日本の「國體」）や、（独立宣言によって基礎づけられる）アメリカの「國體」と比較可能な「Ⅰ正統」として捉え直されることになった。

「正統 (legitimacy) に注目して政治を考えるこうした態度は、しかも丸山によって明確に自身の『政治の世界』(一九五二年) の延長線上に意識された。『夜店』としてすでにたたまれたはずの「丸山政治学」(『政治の世界』はその代表作と見なされてきた) は、この時期、「正統と異端」研究会において、実は新たな展開を見せ始めていたのではないだろうか。

※本報告の詳細は、『センター報告』第九号に掲載。

二〇一三年度研究会・公開研究会

◇第三回研究会

開催日 二〇一三年四月二六日

報告者 小檜山ルイ

論 題 「知識人」と「家庭」問題——文化生活運動をヒントとして
概 要 丸山眞男がジェンダーに関することを何も言っていない、という指摘を以前に平石先生からいただいたことから、それはなぜか、と考えはじめた。

というのは、明治初年以來、多くの「知識人」——それを今仮に、サルトルをベースにして、知識を持ち、かつ、公的な発言力・影響力を行使する人と理解すると——が、結婚や家族／家庭といったジェンダー色の濃い、女性がからむ問題を正面から扱って来たからだ。明六社の森有礼、中村正直、福沢諭吉、『女学雑誌』の巖本善治などがすぐ

に思い浮かぶ。また、徳富蘇峰の民友社が『国民之友』と『家庭雑誌』、対抗する政教社が『日本及日本人』と『女性日本人』を出していたように、女性に関係する問題群を扱う雑誌が、主要雑誌に寄り添うように同一の出版社から発行されていた例は、戦前にはいくつもあった。

明治以降の「知識人」は、西洋由来の「知」と対峙することが必須だったわけだから、その中に含まれたジェンダー関連問題群は、彼らの「知」の重要な構成要素であった。特にキリスト教を通じて西洋に接近した場合、そのキリスト教はほとんどの場合、アメリカ発の女性化したキリスト教であり、主婦を疑似聖職者とする「小さな教会」としての「家庭」とそのような「家庭」によって支えられる公(おおよけ)、国家(nation)を唱道していたから、「女性」、「結婚」、「家庭」、「子供」といった問題は、到底無視できない政治的課題となる。

ジェンダー関連問題に対する「知識人」の関心は、丸山眞男の親の世代(一八八〇年前後生まれ)において、頂点を極めた(のではなからうか)。この世代に属する京都帝国大学教授厨川白村(一八八〇—一九二三)は、『近代の恋愛観』を書いて、一世を風靡した。私が現在関心を抱いているのは、森本厚吉、吉野作造、有島武郎という同世代トリオが、ユニヴァーシティ・エクステンション(高等教育機関が保有する知を広く大衆に開放しようという運動、大学解放運動)として一九二〇年以降展開した「文化生活運動」である。

森本、吉野、有島は、キリスト教、社会主義へのシンパシー、恋愛感情と結婚の接合という問題意識、物質的生活水準の向上と「家庭の

和楽」あるいは「一家団欒」への欲望等を共有し、「家庭」における日常生活の豊かさ（物質的かつ精神的／感情的）を多くの人が獲得することが、「平等」を促進し、デモクラシーの礎を築くと考えていたようだ。特に森本は、「中流階級」は、下層労働者階級と上流階級の橋渡し役となりえ、その豊かさと拡充は、階級対立の先鋭化を和らげると考えていた。森本にとって、そのような豊かさは、合理的な消費によって支えられるもので、その消費の指標を具体的に示すべく、やがて「文化アパートメント」の建設・経営、女子文化高等学院（現新渡戸文化学園）の設立へと邁進していった。

森本厚吉を中心とする「文化生活運動」以降、大正・昭和前期に「文化」の独特な用法——文化住宅、文化村、文化鍋、文化包丁等々——が流行したことが示すように、森本の主張は、大衆的浸透力を持ちながら、一般には俗物的と受け取られるようになっていったようでもある。

とまれ、太平洋戦争前までに、一定の「文化的」ライフスタイル——どういう家に住み、どこに住み、どのような妻を持ち、どのような家庭を持つか——は、「中流」の模範たる「知識人」の構成要素の一つになりかけていたのではないだろうか。森本厚吉と有島武郎の揺籃の地、札幌には、「桑園博士町」、「医学部文化村」といった北海道帝大教授の大規模文化住宅が集まる地区があったし（後者は森本の運動以降にできた）、吉野作造は、伊豆の畑毛温泉で別荘地を開いて「葦山別荘団」を結成、一定のライフスタイルと思想を共有する人々で共同体運

営を行った。法政大学の教員の間で「法政大学村」と呼ばれる別荘地ができたのも一九二〇年代のことである。

丸山眞男世代の「知識人」にとって、ジェンダーに関わる問題群が、その視野から排除されたとするなら、それは、この世代の特徴なのではなからうか（むろん例外もあるが）。この世代の「知識人」、あるいは、少なくとも丸山にとって、「家庭」や「文化的」ライフスタイルはすでに既得のものであったからだろうか。あるいは、アメリカによる占領と女性の地位の向上で、女の問題は戦後になってはじめて女たちに委譲された（男女の分業、女性独自の言論空間の創世——アメリカでは一九世紀的構図）のかもしれない。さらには、丸山世代の男性の多くは、軍隊経験をしているから、ホモソーシャルな友愛の強化によって、女性を巡る問題を軽視する気風が養われたという推測もできる。

◇第四回研究会

開催日 二〇一三年六月二八日

報告者 荊部 直

論 題 村岡典嗣と丸山眞男・研究スケッチ

※本報告の内容は、本書八三頁以下に掲載。

◇第二回公開研究会

開催日 二〇一三年九月二七日 一般参加者 約九〇名

報告者 黒沢文貴

論 題 再考・戦後の日本近代史認識——昭和戦前期の「戦争の構造」と「歴史の構造」をめぐる

概 要 本報告は、戦後史のなかで形成されてきた日本近代史認識、とりわけ太平洋戦争への道もしくは昭和戦前期をめぐる歴史認識について検討した。それによって、戦後の歴史研究者たちの昭和戦期理解の一端を明らかにし得たと思っている。

なお報告は、次の内容に沿って行った。

- 一 歴史認識の分裂か、多様な歴史認識の共存か
- 二 政治性のまわりついた歴史認識
- 三 「歴史」の「政治化」と実証研究、そして「歴史」の「政治化」の「国際化」
- 四 昭和期の戦争の複雑さ
- 五 昭和期の「戦争の構造」をどのように理解するのか
- 六 「歴史を忘れない」ことからくる対立と和解
- 七 「戦争の構造」と「歴史の構造」

コメント 茂木敏夫

コメント概要 歴史認識を成立させている枠組を検討する場合、その枠組がなぜ採られたのか、それがどのような価値観（あるいは政治性）に基づくものなのか、その背景を考える必要がある。

戦後日本の歴史認識の枠組の変遷を考えると、その背景には近代をどう受けとめるか、という問題が存在していた。西洋近代モデルが確

固としていた時代から、西洋近代モデルの絶対性が崩壊したポスト・モダンの時代へ、と日本は大きく変化した。一方、この時期の周辺諸国では一九七〇年代以降の経済発展とそれにもなう民主化によって、ますます近代主義的になっていった感がある。こうした近代をめぐる日本と周辺諸国とのズレは、戦争や植民地支配をめぐる歴史認識のズレを呼び、結果として歴史は「国際化」した。

朝鮮植民地支配についても最後に言及していたが、その視野を明治日本の内国植民地（沖縄や北海道）にも拡大してみると、同時期の中国清朝の進めた台湾や新疆など辺境への直接支配などが視野に入ってくる。すると近代における植民地主義という問題が、東アジアの近代に共通する問題として浮上してくる。それによって丸山眞男や竹内好など戦中戦後の日本の思索は、東アジアに共通する普遍的な知的遺産として開かれてくるに違いない。

※本報告及びコメントの詳細は、『センター報告』第十号に掲載。

◇第五回研究会

開催日 二〇一三年十一月二九日

報告者 中田喜万

論 題 天皇概念の歴史的展開——その称号・系図・史論

概 要 二〇世紀の日本の知識人たちが否応なく直面した課題が天皇および天皇制であったことは多言を要しない。実には天皇制こそが、ある時期の政治学の最重要の研究対象であった。丸山眞男が晩年に傾

注した「正統と異端」の研究も、その発端には近代日本における「正統」としての天皇制が念頭にあったことは容易に推測される。

したがって、その天皇および天皇制の問題にふれようとすれば、かつての日本の政治学・政治思想史をまるごとふり返らなければならなくなるが、それはこの小考で扱うには巨大に過ぎる。ここでは角度を変えて、次のように問題を設定してみた。すなわち、国民国家は想像上の産物であるといわれるが、しかし日本の場合もその議論が説得力をもつかどうか。というのも、「天皇は単なる表象どころか身体を有する全くの実在であって、戦前はそれこそが「國體」そのものだったのではないか？」という疑問に対してきちんと反駁できるか、ということである。

このことについて考えるため、天皇と今日では呼ばれている歴史上の人物やその周辺を詮索することを一旦保留し、「天皇」という称号、言葉そのものの来歴・変遷を確認することにした。まず古代における導入（むしろ中国の模倣）の経緯を、津田左右吉以来の研究史を整理しながら確認し、中世における忘却（古代での導入の理由と表裏の関係にある）までを論じた。意外なほど短い期間しか実際には使用されていないのであった。次に、この称号の近世における復活について、光格天皇（という漢風諡号を周到に用意した人物）の個性に注目する先行研究とは別に、江戸時代の史論の中から説明できないか、検討を試みた。特に南北朝問題は大きく、とても「万世一系」などといえない複雑な事情があった。江戸時代の史論は、そのことを如何に説明す

るかに腐心したわけである。

幕末以来の国家統合の象徴としての「天皇」は、それまでの複雑な歴史的存在を単純化・抽象化したものである。近代国家による公定の説明は、しかしながら明治初期に一挙になされたわけではなく、様々な出来事の都度、形作られていった。肝心の天皇系図も、（そもそも古代から何度のもの作爲が加わってきたものであるが、）今日みるような形がほぼ確立するのには大正期までかかっている。二〇世紀の大きな正統たる「天皇」のあり方が、実はその直前まで紆余曲折を経た、できたてほやほやの神話であったことが見てとれる。

研究会当日は、時間切れのため、後半部分はあまり踏みこんで論じることができなかった。質疑応答で、関係する貴重な史料の紹介や中国史研究からの示唆を得た。御教示に感謝しつつ、あらためて公表できるよう他日を期したい。

◇第六回研究会

開催日 二〇一四年二月一二日

報告者 雨田英一

論 題 長谷川如是閑「伝統と教育―教育者としての自覚―」（『改

造』一九五二年七月）

概 要 この評論は、戦時下で「伝統」継承の立場から積極的に国家教育論を展開していた長谷川如是閑（一八九五―一九六九）が、敗戦後の民主化過程においても引き続き同じ立場から国民教育論を論じ

ていたことを示している。また彼の「伝統と教育」論が集約されており、戦前・戦後を貫く長谷川の基本的な考え方を捉える上で、重要な評論だと考えられる。

長谷川は、国体論的教育を伝統として復活させようとする政府と、それに抵抗する日本教職員組合との対立状況を意識して書いたと思われるが、その基底には、日本国民を「感化院（占領軍の支配下）に入れられた不良児」と見なさざるを得ないほどに、自主的な民主化への深い懷疑を抱きながらも、民主化の途を模索していた長谷川の深い思索が流れていた。それを、他の、『改造』掲載の評論や『私の常識哲学』（一九五四）等をも手がかりに整理しようと試みた。報告は論点が不明瞭であったが、いくつかの重要な論点を指摘され、柳田國男や和辻哲郎との比較について教示を得ることができた。

長谷川の考えは、理想的人物像を「職能人」とする「広義の教育」を日本の「伝統」とみなし、民主化の方途として再生・創造することにあつた。「広義の教育」とは、人々の日常的な「生活」で営まれる「節度のある」「形」をとおした教育（「伝搬」）であり、学ぶ「意欲」を育み、「感覚」を「涵養」し、自己制御のできた、自発的な「行動」的「人間」を育てる得る有力な教育であり、民主化の「有力」で「確実」な方法だと位置づけられた。副題の教育者も一「職能人」としての自覚に立つべしとされた。

長谷川の「形」「型」の人間形成論は、丸山眞男も学んだと考えられているが、日常生活の感覚や感情を重視した「広義の教育」の機能と

意義の捉え方とともに、大衆社会における人間形成のあり方を考える上でも、多くの示唆を得られる評論と考える。

二〇一四年度研究会・公開研究会

◇第七回研究会

開催日 二〇一四年四月二二日

報告者 近藤邦康（東京大学名誉教授）

論 題 一九八九年三月二〇日丸山眞男・李沢厚対談

※本報告の詳細は、『センター報告』第十号に掲載。

◇第三回公開研究会

開催日 二〇一四年九月二二日 一般参加者 約一七〇名

報告者 渡辺 浩

論 題 どんな「男」になるべきか…江戸と明治の男性理想像とその変化

概要 「女」とは、そして「男」とは何か。また、それぞれはいかにあるべきか。その答は様々であり、変化する。しかも、その答が個々人の生き方を左右し、社会・政治の構造や状況と関連している。この報告は、維新の前と後の日本における男性理想像を主題とする。

徳川の世の初期において、武士は「男の中の男」だった（花は桜木、人は武士）。そう信じられることが、政治体制の安定と連関していた。

しかし、様々な要因により、徐々に武士はその耀きを失っていった。

一方、町人たちによる別の理想像も生まれた（「分限者」「大尽」「粹人」「通」「丹次郎」等）。誇りを失いつつあった武士たちのためには、中国の思想・歴史・物語から学んだ「義士」「英雄」「豪傑」という理想も登場した。幕末の「志士」はその延長にある。明治維新は、「志士」たちによる革命だった。その「成功」によって（「維新の三傑」）、その後、「志士」「壮士」「国士」、そして「英雄」「豪傑」の理想は称揚され続けた（「富豪」「文豪」はその応用）。それは、一面で自由民権運動の活動家たちをも支えた。しかし、この男性理想は徐々に陳腐化し（「東洋豪傑」、公然と批判もされた）。

一方で、「紳士」が登場した。パンカラな「書生」からハイカラな「紳士」という出世の理想も描かれた。また、「紳士」の応用として「紳商」「田舎紳士」等の語も造られた。しかし、『紳士録』の刊行が象徴するように、「紳士」は単に社会の上層の男性を指す語に速やかに希釈され、社会や政治への不満は「紳士閥」への反感ともなった。それは、一面で、「紳士」と対置される「豪傑」「英雄」への憧れを持続させる土壌となり、他面で、男性理想像を描けない「煩悶青年」たちの出現にもつながった。「煩悶青年」たちは「新しい女」たちと同世代である。彼等には共通の世代的背景があった。しかし、（一見、「性」に中立的な）「人格主義」「教養主義」も、「煩悶青年」たちには救いの手をさしのべたものの、実は、「新しい女」にはさしのべていない。では、戦後の「近代的人格」「主体的人格」「強い個人」の理想はどうか。その「性」

の角度からする検討は、これからの課題であろう。

◇第八回研究会

開催日 二〇一四年十一月二八日

報告者 土合文夫

論 題 丸山眞男と文人たちとの交流

概 要 『丸山眞男集』や『丸山眞男座談』の目次、あるいは『丸山眞男書簡集』に収められた書簡の宛名人を眺めて気づかされることの一つは、丸山眞男が多くの文学者たちと深い交流を持っていたという事実である。丸山が政治学者であるとともに、人文の領域に接すると言ってもよい「政治思想史家」であつたことを考え合わせても、丸山の文人たちとの長期にわたる親密な関係には通例の「政治学者」からは想像しにくいものがあると言つてよからう。

筆者は政治学にも政治思想史に対しても門外漢であり、丸山の仕事の本体を論評する資格や能力を持つ者ではないが、丸山と文学者たちとの交流を見ることによって、少なくとも、丸山の学問が生み出された人間関係の風土の一端を窺えるのではないかという思いがあった。

また、機会を得て丸山の残した膨大な楽譜群の調査を一年半余り担当したなかで、丸山の音楽に寄せる尋常ではないほどの強い思いの基底にあるものは何なのか、という大きな問いが残り、この二つがどこかで通底するのではないかと考えて今回の報告に至った。

※本報告の詳細は、『センター報告』第十一号に掲載。

◇第九回研究会

開催日 二〇一五年二月一三日

報告者 眞壁 仁

論 題 神の憑依するところ——昌平黌・義塾改革と徳川日本の儒礼

受容

※本報告の内容は、『学士会会報』第九一五号(二〇一五年一〇月)に掲載。

二〇一五年度研究会・公開研究会

◇第一〇回研究会

開催日 二〇一五年五月二九日

報告者 茂木敏夫

論 題 丸山眞男の論説と中国、東アジア——考察事始め

概 要 本研究プロジェクトにおいて報告者が担当する課題は、「東アジア論と丸山眞男」である。この課題については、(1)丸山の中国や東アジアに関する議論を通じて、彼の中国(東アジア)認識を考えたり、その中国(東アジア)言説が、同時代の政治・社会・文化状況においてどのような意味をもっていたのか、また同時代および後世においてどのような影響関係にあるのか、さらには丸山の議論全体において中国(東アジア)言説はどのような役割をもっていたのかを考えた

りする、つまり丸山の議論を通じて中国や東アジアを考えるとという方向と、(2)中国や東アジアの側が丸山の議論をどう読むのか(読んだのか)、今日の中国や東アジアの知的状況に丸山の議論はどう関与し得るのかなど、中国や東アジアの知的状況から丸山の議論の可能性を考えるとという方向と、二つの方向での考察があると思われる。

そのような観点から、報告者は現在『丸山眞男集』や『別集』、『講義録』を年代順に読み直している。その読み直し作業中の初歩的な考察(事始め!)として、本報告では、(1)に関して、丸山の日本政治思想史研究の方法が中国思想史研究に与えた影響について、その特徴を概観することで、丸山の日本政治思想史研究の広がりをもとに、(2)に関して、現在進行中の中国や東アジアの構造変動のなかで東アジア論を構築するに際して、丸山の議論がこれにどう関与できるか、その可能性について、報告者の最近の研究とも関係させながら簡単な展望を試みた。

まず、(1)中国思想史研究における丸山の日本政治思想史研究のプレゼンスに関して、丸山のパラダイムを継承して中国に適用した研究として、野村浩一「清末公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義」(『国家学会雑誌』七一(七)・七二(二)(三)、一九五七・五八年、後に『近代中国の政治と思想』筑摩書房、一九六四年に収録)を、また、丸山のパラダイムとは対照的なアプローチとなった島田虔次『中国における近代思想の挫折』(筑摩書房、一九四九年、一九七〇年改訂版)を取り上げ、その論理の特徴を丸山のパラダイムと比較しつつ、簡単に整理した。

野村の研究は、西洋政治思想史の枠組みを利用して、伝統思想の展開の中から近代的思惟を見出そうとする点に丸山のパラダイムの援用が見られ、丸山が荻生徂徠に見た「聖人の作為」を康有為の「孔子改制」に見出している。一方、島田にとっても、「今は亡き丸山眞男と論争したい」と彼自身述べていたといわれるように（『先学を語る——島田虔次先生』『東方学』第二五輯、二〇一三年、二二五頁）、丸山は大きな存在だった。聖人の内面が自然や社会の秩序に連続していくことで全体として完結するという朱子学的思惟の自己展開のなかに、政治を内面から切り離して外在化させていった徂徠の道筋を見出し、そこに近代的思惟を見ようとした丸山に対して、外在化の徹底とは逆に、内面化を徹底させていった王学左派の、その究極にこそ近代思惟を見ようとしたのが島田だった。

また、丸山のパラダイムで中国近代思想史の流れを抽出しようとする野村のアプローチとは異なる、小野川秀美『清末政治思想研究』（東洋史研究会、一九六〇年。増訂版、みすず書房、一九六九年）のアプローチもとりあげて、それぞれの中国近代思想史研究の特徴についても若干の考察をおこなった。

ついで、(2)に関して、中国や東アジアの構造変動について、その歴史的位置づけを試みる拙論を紹介しながら、現在の東アジアの知的状況について整理したうえで、この地域を構想する紐帯として何が考えられるかという問いを、最近中国での研究会において投げかけられ、それに対して、非欧米の近代という「共通の歴史経験」を考へること

ができるのではないかと答えた、報告者の経験を紹介した。その問答を踏まえて、近代日本が経験した正負の経験は、非欧米の近代にとって大きな知的遺産になりうること、だとすれば、丸山眞男たちが近代日本の直面した諸問題と格闘した経験のもつ意味は大きく、むしろこの知的経験は、これからの東アジア、のみならず世界において普遍的な意味をもつのではないかとの指摘をおこなった。

◇第一一回研究会

開催日 二〇一五年七月二四日

報告者 奥波一秀（日本女子大学准教授）

論 題 丸山眞男と音楽にまつわるいくつかの謎

概 要 丸山眞男にとっての音楽という問題を、丸山文庫の手沢本の調査、丸山の周辺の音楽論の検討などを通して、研究している。本発表では、長谷川如是閑、佐々木幸徳、宮澤俊義、内田義彦らの音楽論との対比を通して、丸山の音楽論の解明を試みるとともに、いくつかの事実関係等、残された課題についても確認した。

如是閑は、戦前・戦中、国民性と音楽との関係、日本の国民音楽の条件について論じていた。音楽をその背後の生活との関係から見ると、丸山とも通じる音楽論も目を引くが、とくに時局との関係でいえば、日本の国民音楽にとって、出自が外来かどうかは重要ではない、との指摘が興味深い。同時期、宮澤俊義は、西欧崇拜と排外主義の双方を批判する一文を記しているが、力点はおそらく、当時強まり

つつあった国粹主義的な動きを牽制することであった。宮澤には、当時普及しつつあった「音感教育」について、一定の留保はしながらも、期待を述べた一文もある。

このように、音楽についての思考は、決して丸山だけに特異なことではなく、前後左右にみられた。とくに佐々木幸徳の音感合唱・音感教育の影響が着目に値する。丸山は、すでにふれた宮澤俊義、野田良之とともにYMCA音感合唱教室に通い、佐々木の音感教育実践・思想にふれている。

佐々木の音感教育の思想的意味は、戦後の雑誌『未来』座談会での、内田義彦とのやりとりにも反響している。内田も実は、佐々木音感合唱の（間接的な）弟子で、丸山とともに強調しているのは、「和音」の重要性である。明治以来、西欧的な音階と旋律とは、すでに土着化したが、西欧近代音楽の核心としての「和音」はいまだ、日本人の耳には馴染んでいない。これを移入・定着させることが、戦後丸山の音楽啓蒙の課題だった。

「和音」は、内田や丸山にとっては、高尚な音楽趣味の問題ではなく、和音を可能にする「合理化」の問題であって、西欧の普遍的合理性の代表として理解されていた。

◇第一二回研究会

開催日 二〇一五年一〇月二日

報告者 平石直昭

論 題 丸山眞男・一九五六年度講義の概要

概 要 東大法学部における丸山の日本政治思想史講義は、これまでに、敗戦前後の時期と一九六〇年代半ばの四年間分とが公刊されてきた。しかしその中間にあたる五〇年代の後半部分は未公刊のままである。この報告では、まず五〇年代後半の丸山講義を復元する意義について考察し、ついで私が担当している五六年度講義のうち、第二章分までの概要を紹介した。

五〇年代後半は、丸山の学問・思想の形成にとって重要な時期にあたる。五八年一月に出た座談会「戦争と同時代」で丸山は、自分が知的格闘の対象としてきた天皇制とマルクス主義の両方が近年実体性を失い、それに対応して自らもここ一、二年精神的なスランプだと発言している。しかし実際には当時の丸山は結核療養生活を終えたあと、旺盛な知的活動を再開している。五六年から五七年にかけて『現代政治の思想と行動』（上・下）を公刊して大きな反響をよび、その後「反動の概念」（五七年一月）、「日本の思想」（五七年十二月）、「ベラー・徳川時代の宗教」について（五八年四月）などの力作を矢継ぎ早に出している。とすれば彼がいう「スランプ」は何を意味するのか、よく考えてみる必要があるう。

この問題を考える上で、同時期の丸山の講義を検討することは重要な意味をもつ。六〇年代以後に理論化される「原型」論の祖型や、論文「開国」や「忠誠や反逆」等で示される日本思想史に対する新しい分析視角が講義の中で萌芽的に示され、次第に分節化されてゆく様子

がわかるからである。別言すれば、この時期の講義を復元して同期の既刊論考と併読すれば、古代以来の日本思想史に接近する彼のモチーフや思索の深化過程が一層よく理解できるのである。こうした点に五〇年代後半の講義を復元する意味があると考ええる。

五六年度講義の底本としたのは丸山の自筆ノート（東京大学出版会刊『丸山眞男講義録』第六冊の「解題・付」参照）であるが、これは五九年度にも使われており、両年度の仕分けが難しい部分がある。またノート上の断片的なメモを、講義で敷衍しているような箇所も多い。こうした部分については受講した学生二人（横溝正夫、近藤邦康両氏）の筆記ノートを参照して編者の責任で文章化する方法をとった。

この年度の講義全体は六章からなるが、第四章以下は徳川時代の思想史を扱っており、上記の自筆ノートには対応箇所がない。従来の講義原稿ないしノートを再利用したと思われる。とくに第五章の「石門心学論と第六章の国学論は四八年度講義録と照合すると、ほぼ後者と一致している。ただ第四章「徳川封建制と儒教思想」は、以前の原稿類の中に同定できる資料を発見できていない（後に山辺春彦氏が、これに当たると思われる資料を文庫所蔵原稿類から発見して教示してくれた）。復元作業は第三章「武士階級の意思（觀念）形態」までほぼ終わっているが、当日は時間の関係もあり、序文、第一章「神国思想の端緒的形態」、第二章「鎮護国家と末法思想」までの概要を、主題や項目に即して紹介した。

議論のなかで、松沢弘陽、宮村治雄の両氏から有益な指摘があった

ことを付記しておきたい。

◇第四回公開研究会

開催日 二〇一六年二月一九日 一般参加者 約一二〇名

報告者 宮村治雄

論 題 中江兆民『三酔人経綸問答』再読——「理学」と「経綸」の間で——

概 要 『三酔人経綸問答』は、中江兆民の「主著」とされ、論じられることも多い。しかし、そのテキストが成り立つ主体的な文脈に沿って解読されることは、必ずしも十分に果たされてきているとはいえないように思われる。

兆民は、この作品に先だって、彼の「経綸」の基礎を形造るルソーの『社会契約論』や『学問芸術論』の翻訳だけでなく、フランス革命史の叙述や、ルソー批判の紹介などをも試みていたし、彼が「理学」と呼ぶ *philosophie* に関連する翻訳や著作を行っていた。それらの著訳書、および彼が主宰した仏学塾での塾生たちと共同して刊行した『政理叢談』雑誌その他の著訳書は、同時代日本での彼の特異な知的視野と位置とを示している。

兆民の「主著」は、そうしたサブテキスト群の広がりや奥行きの中に置き直されるとき、どのような姿を開示するのか。できるだけ、新たな諸側面に即して素描した。

二〇一六年度研究会・公開研究会

◇第一三回研究会

開催日 二〇一六年五月二五日

報告者 湯浅成大

論 題 丸山先生の英文翻訳にあたって

概 要 当初私の研究テーマは、「丸山眞男のアメリカ観」と設定されていたが、現在は「丸山先生の英文原稿の翻訳作業」というように変更されている。

本研究会では、丸山先生の英文原稿翻訳の一般的問題点を報告し、かつ「Recent Trends of Japanese Intellectuals」自筆英文原稿、メモ」(資料番号224)の一部分の翻訳を試み、それを発表して参加の先生方の批評を仰ぐことにした。一般的な問題点については、英文に関しては非常に几帳面な英文で難解なものではなく、手書きの字も日本語よりは読みやすいので、その原稿そのものに関しては問題ないが、適切な訳語の選択、それから原稿が書かれた(あるいは、多くは講演原稿であるためその講演会が開催された)背景や時代状況については、私の知識が不十分であるため、専門の方の助言を仰ぎたいとお願いした。英文原稿の試訳については、訳文を添えて検討していただいたが、訳語の問題など適切なアドヴァイスを受けることができ有益であった。

研究会の後半で、プロジェクトとして、どの原稿を正式に翻訳する

かということを協議し、丸山先生がイギリスで行った「Marxism in pre-war and post-war Japan」(資料番号365)を対象とすることに、後日決まった。

◇第五回公開研究会

開催日 二〇一六年六月一七日 一般参加者 約八〇名

報告者 小檜山ルイ

論 題 近代日本の「知識人」における「ホーム」論の系譜

概 要 意外なことに、丸山眞男ほど広い視野を持った知識人に女性に関連する問題意識はほとんどないという。なぜなのだろうか、という疑問から本報告は出発している。

女性に関連する問題群は、一九六〇年代半ば以降の第二波フェミニズムの隆盛のなかで、重要な知的探求の対象として浮上した。それは主に女性たちの自己主張に基盤を置いて発展し、GLBTQの研究や男性学といった展開も生まれ、ジェンダーは、今では特に人文社会科学において不可欠の観点となりつつある(はずだ)、というのが、一般的にはもともと理解しやすい図式である。

しかし、実は、明治維新以降の男性知識人の一部は、女性のあるべき生き方、男女交際、結婚、家、家庭といった問題を盛んに論じていた。戦後の丸山眞男が研究上の情熱を傾けた福沢諭吉は、その好例である。本報告では、ホーム(家庭)論を中心に据えて、彼らの議論の系譜を整理することで、丸山眞男(の世代)の知的視野からなぜ女性

をめぐる諸問題が欠落したのかを考えた。

Ⅲ 講演会・シンポジウム

丸山眞男研究プロジェクトでは、講演会およびシンポジウムを年一回、企画・開催した。講演会は、本プロジェクト以前から開催してきた丸山眞男文庫記念講演会を、本プロジェクトの研究・事業の趣旨に沿う形でテーマ選定・講師人選を行い、継続してきた。シンポジウムは、五年間にわたる研究・事業の中間的成果を二〇一四年度のシンポジウムで、最終的成果を二〇一六年度のシンポジウムで、集約的に発表した。なお、シンポジウムは講演を含んでいたため、シンポジウム開催年は丸山文庫記念講演会を開催しなかった。

二〇一二年度講演会

◇第一四回丸山眞男文庫記念講演会

開催日 二〇一二年七月五日 一般参加者 約一五〇名

講師 アンドルー・ゴードン（ハーバード大学教授）

演題 世界に向けて東日本大震災を記録する——危機アーカイブの効用と構築のための課題

概要 二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災は、日本のみならず世界に衝撃を与えた。この記録を後世に残すために、ハー

バード大学では「二〇一一年東日本大震災デジタルアーカイブ」の構築を進めている。一見、丸山眞男とはまったく関係のないプロジェクトのようにも思えるが、このアーカイブを構築することで、市民が参加できる公共の場を作り出せるのではないかと私達は考えている。この根底には、丸山がその必要性を説いていた市民社会的発想があると言えよう。

本講演では、このアーカイブを構築することになった理由や、このアーカイブがどういったものを、「繋がり」「発見」「参加」という三つのキーワードを通して説明した。そして、今後の課題をあげながら市民が参加できる開かれた社会へのプロセスやその過程で生じる問題を考えた。

※本講演の内容は、『センター報告』第九号に掲載。

二〇一三年度講演会

◇第一五回丸山眞男文庫記念講演会

開催日 二〇一三年二月六日 一般参加者 約一二〇名

講師 加藤 節（成蹊大学名誉教授）

演題 丸山眞男の思想世界——デモクラシー論との関連において概要 丸山眞男という人は、自分が何をしているかについて極めて自覚的な思想家であった。丸山が、自分の仕事の意図や目的が何であつたかについて言及することが多い事実がそれを示している。そう

した自身による言及を手がかりにして整理すると、丸山の仕事は以下の三つの領域に大別することができると言つてよい。すなわち、日本の「良き」思想的伝統を過去の歴史のなかから取り出してくる作業、日本人の精神構造や行動様式の欠陥や病理を分析する作業、外来思想との文化接触の型を規定する日本人の思惟構造の原型を探る作業がそれである。しかも、私が見る限り、丸山の仕事のこれら三つの領域はバラバラのものではなく、全体として一つの円環構造をなしていた。この講演では、丸山の仕事の三つの領域が織りなすその円環構造をデモクラシー論に関連させて説明することによって、丸山の思想世界に關する一つの全体的な見取り図を描くことを試みた。

※本講演の内容は、『センター報告』第十号に掲載。

二〇一四年度シンポジウム

◇丸山眞男生誕100周年記念中間シンポジウム

開催日 二〇一四年六月二七日 一般参加者 約四五〇名

テーマ 現代世界の中で丸山眞男をどう読むか

①講演

講師 荻部 直

演題 政治のための教養——丸山眞男百歳

概要 政治に参加する市民はどんな考え方をすればよいか。そう

した意味で「政治のための教養」を切り口として、丸山思想について紹介したい。丸山は戦前・戦中期から思想史研究者として活躍していたが、言論人としての本格的活動は戦後からである。その出発点としての庶民大学三島教室は、庶民に自分の思想を語り、対話の中で自分を見つめ直す相互教育の場として、丸山のデモクラシーへの信念を支えた根源的経験であった。

同時にリベラル・デモクラシーが、二〇世紀の社会では基盤を掘り崩されているという問題も彼の意識にあった。それは早く「政治化」現象として論じられたが、戦後には、大衆社会でマスメディアが人々の感情を刺激して熱狂的な政治参加へと動員し、あるいは娯楽情報に関心を集中させて政治的無関心を招き、価値観が画一化する危惧が語られている。

リベラル・デモクラシーを支える理性への信頼と、その存立を困難にする現代的条件の認識とが葛藤するなかで、丸山は思考を続けた。彼が矛盾解決の糸口として考えた一つは「遊び」としての知ではないか。ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』をふまえて丸山が考えたのは、実用性を意図しない「遊び」としての知的営為の役割だった。ルールを共有した上で競いあう「遊び」の修練を重ねることで、異質な者が共存する営みとしての政治に関わるための判断力も培われる。丸山が大学教育、ひいては成人教育一般に期待したのはそれであった。

②パネルディスカッション

報告者 油井大三郎

論 題 丸山眞男とアメリカ文化の交錯

概 要 三点について考察した。① 丸山は『思想の科学』に集まった知米派知識人と交際し、アメリカ思想になじんだ。② 五〇年代前半には、アメリカ政治学の行動主義を市民的民主主義の変質に対応し、その攪乱要因の均衡条件を探索するものと評価した。他方米国は「赤狩り」時代であり、友人のE・H・ノーマンが自殺した。この面で丸山はアメリカを批判した。③ 六〇年代前半に、日本を途上国のモデルにしようとして「近代化論」が出された。米側は数値化できる近代化の指標を示し、日本に適用してプラスの結論を出した。一方日本側は軍部独裁的な体制下で戦争に突入した要因を問題とした。丸山は精神の近代化や価値体系の問題を強調した。この視点はやがてベトナム戦争をへて米側に受容された。一方五〇年代半ばから日本は経済成長期に入り、大衆消費社会化が進んだ。その中で自立した市民をどう確立するか。「永久革命としての民主主義」を深める作業と共にわれわれの課題であろう。

報告者 區 建英

論 題 丸山と中国の近代的思考の模索——私の世代の体験を中心

に

概 要 丸山の『日本の思想』における課題設定と方法から学んで、文革の原因究明を志した。また丸山の福澤研究にふれ、「独立自尊」が

意味する個人の自立や、国民がただ統治の客体になっているような体制を批判する議論に共鳴した。だが自分のめざした思想の価値を問う研究は壁にぶつかった。留学し丸山の指導を受けることで道が開けた。

中国では改革開放政策下で新思想が流入し、経済好転や福祉改善の中で希望がうまれた。また特権階級の腐敗や不公平の中で民主化運動が発展した。丸山はこの運動を支持した。だが「六四」以後、政治的無関心や拝金主義が広がる反面で権威主義的政治が出てきた。今世紀にはいり権利意識が向上し、政権も「親民」政治や「民意政治」を唱えだした。しかし「父母官」による仁政と教化という考えには、伝統儒教的要素の再現が見られる。秩序形成に参与する人民の自主的精神も成長したい。丸山の方法を活用し、精神構造の深層に潜む執拗低音を追跡する必要がある。

報告者 趙 星銀（東京大学大学院博士課程）

論 題 韓国における丸山眞男

概 要 一九四五年八月一五日以降を日本では戦後とよび、「もはや戦後ではない」ともいうが、韓国では「未だ戦後ではない」。朝鮮戦争の停戦協定は休戦の合意にすぎない。軍出身者の独裁政治はこの状況と関連する。植民地、南北分断、独裁を経験して、より民主的な政治とより豊かな経済をどんなバランスで推進するかが韓国知識人の問題である。

この環境で丸山はどう受容されるか。韓国の近代化は植民地性の克服も課題とする。福澤は植民地支配を正当化したと解されており、彼を偉大視する丸山は批判される。だが思想をその可能性において捉える丸山の方法は、親日か反日か、北か南かでは割りきれない韓国史上のグレー・エリアの分析に有効だろう。

コメント 聶莉莉（東京女子大学教授）

コメント概要 専門分化が進んだ日本で、学問と自分の問題意識・政治に翻弄される草の根の中国社会の分析」との衝突に悩んだ。「超学問的な動機」と「厳密な学問的操作」との結合という丸山の南原評に励まされた。文革の狂乱後「自分とは何か」を自問した。「個の自立」という問題に通ずる。丸山が自分の経験（拘留、兵営生活等）を概念化し、普遍的問題を出した点にも共感した。

※本シンポジウムの詳細は、『センター報告』第十号に掲載。

二〇一五年度講演会

◇第一六回丸山眞男文庫記念講演会

開催日 二〇一五年一月二七日 一般参加者 約一六〇名

報告者 古矢 旬（北海道大学名誉教授・北海商科大学教授）

演題 丸山眞男と「アメリカ問題」

概要 丸山眞男とアメリカとの関わりについては、すでにこれま

で入江昭、清水靖久、油井大三郎各氏をはじめとする方々が、当センターの企画にかかる講演会や研究会等において、報告をされている。これらの報告以外にも、丸山の直接、間接の、また個人的、学術的な「アメリカ経験」に多少とも言及する丸山眞男研究は少なくない。そのことは、丸山の学究生活が、アメリカ合衆国を最大の一方当事国とする太平洋戦争と冷戦という国際政治の大枠の内で展開されてきたことを思うならば当然といえるかもしれない。政治学者としての、また知識人としての丸山が、主たる学究対象、批判対象としてきた日本政治は、その間（そして今日もなお）まさに合衆国によって翻弄されてきたからである。

しかし他方で、このアメリカの影の濃さと大きさに比するとき、これまでの丸山眞男研究において論じられてきた丸山の「アメリカ問題」認識は、やや断片的、あるいはエピソード的な印象を免れない。それは、あるいは「アメリカは分からない」「アメリカは不可解である」という丸山自身のアメリカに対する学術的、文化的な違和感に由来するのかもしれない。この点も含め、丸山は、その世界認識、歴史認識において、「アメリカ」をどのような枠組みの内にとらえ、その存在意義を自らの政治思想史研究の中にいかに位置づけていったのかを試論的に検討した。

※本講演の内容は、『センター報告』第十一号に掲載。

二〇一六年度シンポジウム

◇丸山眞男没後20周年記念国際シンポジウム

開催日 二〇一六年一〇月一四日 一般参加者 約三〇〇名

テーマ 新しい丸山眞男像の発見 その世界大の視圈と交流のなか
で

①講演

講師 平石直昭

演題 丸山眞男文庫の意義と可能性について

②パネルディスカッション

報告者 ヴォルフガング・ザイフェルト（ハイデルベルク大学名誉
教授）

論題 丸山眞男とドイツの思想・学問——戦前、戦中、そして戦
後

報告者 孫歌

論題 丸山眞男の「三民主義」観

報告者 アンドリュー・E・バーシェイ〔紙上参加〕

論題 プロテスタント的想像力——丸山眞男、ロバート・ベラー、

そして日本思想研究に関する覚書

報告者 金 錫根（峨山政策研究院教授）

論題 韓国における丸山眞男の思想・学問の受けとめられ方

コメント 黒沢文貴

※本シンポジウムの詳細は本書一一三頁以下、概要は『センター
報告』第十二号に掲載。